

今こそ熱い想いを！

社会資本は、地域住民の生活から国家経済、さらには地球環境に至るまで、非常に広範な事柄に関係し、また、非常に多くの重要な役割を担っています。

良質な社会資本整備を行うとともに、それらを良好な状態で維持し、また、持っている機能を十分に発揮させることが我々に課せられた使命です。

さて、「公共事業の品質確保の促進に関する法律」が施行されて2年が経ち、その後、同法に基づいた「基本方針」も策定しました。

一方、近年は、公共事業費がピーク時の半分程度に低下したこともあり、低価格で工事を受注する、いわゆるダンピング受注が増加し、その結果、下請け企業へのしわ寄せや、粗漏工事の増加等が問題となっています。その対策として昨年末には「緊急公共工物品質確保対策」を策定し、品質あるいは下請け企業にしわ寄せが懸念される入札を排除することとしました。

さらには、単なる指名競争入札から一般競争入札への移行は、良い仕事をしたことが必ずしも次の仕事の受注に結びつかないため、企業によっては工事の品質よりも利益を優先するおそれがある

と言われております。

そのため、良質な社会資本の整備や管理水準の維持が図れるよう、社会資本整備を調査・設計の段階から維持管理段階までを1つのシステムとして捉え、良質な社会資本整備のあり方を再構築する「国土交通省直轄事業の建設生産システムにおける発注者責任に関する懇談会(発注懇)」を立ち上げ、社会資本整備に関するシステム全体を見直し、その見直し結果を順次、実行しているところであります。

しかしながら、これらは制度の見直しです。真に良質な社会資本整備を行うためには、それにも増して我々、社会資本整備に携わる者の心構えが根源として横たわっていることを忘れてはなりません。

制度の見直しや改革だけで終われば、仏造って魂入れずに近い状態になる危険性があります。

古代ギリシャの哲学者エンペドクレスは「万物の根源は、土・空気・火・水であり、それらを活かすものは人の愛であり、こわすものは人の憎しみである。」と述べました。人間社会で最も大事なものは人間そのものの生き様だ、と言っている気

国土交通省 大臣官房技術審議官
(財)全日本建設技術協会 企画委員会 委員長)

さとう なおよし
佐藤 直良



がします。

では、良質な社会資本整備を実現するために一番大事なものは一体、何でしょうか？

諸制度の制定や改訂、これも大事なことです。しかし、公共調達においてはその底辺に「良い社会資本の提供」という目的がなければ、それらは単なるツールです。立派な制度設計を行っても、それを活かすも殺すも社会資本に携わる一人ひとりが「良い社会資本を提供するのだ」という、強く熱い想いを持てるかどうかです。

昭和の初期、社会資本整備を内務省が行っていた時代のことですが、事業中の道路改良事業において、品質の確保が困難な悪条件の時に作業員に対し「このような時にこそ、丁寧な良い工事をするように」と直接指示した技術屋がいました。

理屈や制度の問題ではなく、「良い物を造りたい」との一心からの言葉です。このような気持ちが良質な社会資本整備の達成に必要な根源だと私は考えています。

社会資本の整備や維持管理は、調査・試験、設計、施工までの多くの段階を経ますが、それぞれの段階における技術者が真摯に自らの業務を遂行

することが必要であり、一部でも不適切に実行されると、全体としての品質は確保できなくなります。各段階における責務の遂行が必要なのです。

各段階の責任を確実に全うするためには、熱い想いと併せて、各自が必要な技術力も身につけておくことも不可欠なことです。

技術は日進月歩ですから、より合理的な、より経済的な、より高品質な社会資本整備を行うためには、現状に甘んじることなく、常に最新の知識を学び、それを業務に反映させる努力が不可欠です。

あるいは、常に現場を知り、それらの知識を現場に適切に反映することが必要となります。

近年、各団体が実施している継続教育制度などを活用し、一人ひとりが自己研鑽に努めることが求められています。

公共事業費の増大が必ずしも見込まれない現在、あるいは、少子高齢化社会に突入した現在こそ、今まで以上に良質な社会資本が求められており、それを担う我々の責任は大きくなってきています。

是非、読者の皆さんも熱い想いを忘れることなく、社会資本整備を進めて頂くことを願うものがあります。